

UCCG-40003



SMETANA

# Má Vlast

Mein Vaterland · My Fatherland · Ma Patrie

Boston Symphony Orchestra

Rafael Kubelik



## CDがCDではなくなった ～それほどの感動体験で聴き手を圧倒する プラチナSHM

CDの音質をよりよくしようという改善と改良の試みは絶えることがない。思いつくだけでも、90年代にはビュア・ゴールドCDがあったし、その他にもアートンといった素材にこだわった製品が話題となったものである。近年ではSHMやHQCDそしてブルースベックCDといった辺りが注目されている。いずれも、1枚のCDに収められた信号をいかに正確に読み取り、よりマスターテープのサウンドに近づけるのかという、涙ぐましい努力の連続であるし、そこには演奏家たちが残したかけがえない音による遺産を最大限の知恵と情熱とで製品化し、聴き手と演奏家とを可能な限りダイレクトに結び付けたいとする送り手側の願いといったものが読み取れるように思われてならない。

しかし、どんなに素材に拘ったとしても、それはCDという規格に添ったものであった。

だが、今回、ユニバーサルがリリースする「プラチナSHM」は素材にこだわりすぎたあまり、CDとは呼べなくなってしまうという、

そんな製品である。それはレアメタルの最高峰たる純プラチナを反射膜に使用することに原因しているが、どうやら、このプラチナの反射率というのが、音楽用コンパクト・ディスクの規定が設けている反射率とは異なるというところで、CDを名乗れないらしい。

だが、それでも素晴らしい音質が確保されるとの判断から、ユニバーサルはリリースに踏み切っている。資料をいろいろと紐解くと、「音質に影響があるのは、反射率よりも反射の質であり、そのためには、敢えて規格外でもやろう」との結論に至ったというから面白い。即ち、これはデータではなく、あくまでも聴いた感動体験が製作に踏み切らせた、いわば掟やぶりのソフトなのである。

もちろん、実際の製品化にあたっては、レーザー光線の不要な反射光を吸収してしまうターコイズブルーというレーベル面を採用、さらにハイビット(176.4kHz/24bit)からダイレクトにCDをカッティングするHRカッティングも採用するなど、こだわりが貫かれている。

今回、筆者はクラシックのリリース分から、三つを聴いた。

まずオーケストラ曲でベートーヴェンの交響曲第23番。カルロス・クライバーがウィーン・フィルを指揮して録音した名盤である。

聴いて驚くのは、音一つ一つの美しさである。オーケストラ音楽であるから、当然それらがブレンドされ、全体としてのサウンドを私たちは聴き取る訳だが、今回のプラチナSHMでは、それ以前に各セクション、各楽器が手にとるかのような鮮明さと粒立ち感で明瞭に浮かび上がっている。それは、ほとんど初めての経験であり、そうしたパートがクライバーの指揮のもとで一糸乱れぬアンサンブルを作り出し、ベートーヴェンの作品を心からの共感と欲びをもって歌い上げている、その現実には吸い込まれてしまう。既に何度も耳にしてきた演奏だが、こうした鮮明さを知り、しかもダイナミックな躍動感に陶酔的な感動を覚えながらも、その部分というのか、細部にまでも神経をはりめぐらせつつ聴くということが可能だという経験をしたのは初めてのことであった。

次にポリニーが弾いたモーツァルトのピアノ協奏曲第23番の第二楽章を聴いたが、ピアノの音そのものがやはり格段に美しい。しかもその美しさというのが、いわゆる感覚美を

超えた強さというのか、人格的な存在感を併せ持っている事実には驚いてしまった。それはポリニーその人の魅力と演奏家として生き方にまでも想いを馳せる、そんな聴き方へと変えてしまうほどである。たかが音のことである。だが、されど音なのである。名演奏家が残した演奏という名の遺産の価値はまさににはかり知れない深みと価値を持つことを教えられた瞬間であった。

最後に現代のヴァイオリン界をリードするアメリカの才媛ハーンのバッハのヴァイオリン協奏曲を聴いたが、それは文字通り生きて弾み、呼吸をしては膨らみ続ける演奏という営みの素晴らしさに心奪われる瞬間であった。ヴァイオリンの艶やかな音色、カンタービレの、ほとんどマジックにも似た快さ、そして弦楽合奏との共演が醸し出す耳に心地よいアンビエントなサウンドなど、現代にもこうした奇跡が生まれ得る現実を知らしめる絶品であった。

プラチナSHMが私たちにもたらす恩恵は計り知れないものがあると信じたい。

## 演奏者と演奏について

指揮者のラファエル・クーベリックは、1914年6月29日に、チェコ・スロヴァキアのプロボリーに、有名なヴァイオリン奏者、ヤン・クーベリック(1880-1940)の息子として生まれ、ブラハ音楽学校で、ヴァイオリンと指揮と作曲とを学び、19歳でその課程を修了して、ブラハ・フィルハーモニーの常任指揮者となり、22歳でチェコ・フィルハーモニーの指揮者となった。1949年イギリスに移り、ロンドン並びにアムステルダムで活躍したが、1950年からシカゴ交響楽団の指揮者となって、1953年までつとめたが、再びイギリスに戻って、コヴェント・ガーデン王立歌劇場の音楽監督となった。現在はヨーロッパの管弦楽団を指揮するとともにアメリカでもメトロポリタン歌劇場の初代音楽監督就任をはじめ、ボストン交響楽団に客演するなど、演奏に録音に活躍している。

一方ボストン交響楽団は、アメリカ第一流というよりは世界における優秀な管弦楽団のひとつで、アメリカにおいてはニューヨーク・フィルハーモニーにつぐ長い歴史をもってい

る。創立は明治14年の1881年で、銀行家ヘンリー・ヒギンソンの私有の管弦楽団として発足したが、大指揮者ニキシュによって基礎が築かれ、カール・ムックによって成長させられたが、第一次大戦のときドイツ人であったムックが解任され、かつドイツ国籍の楽員の多くが免職になったため一時は存続が危ぶまれた。しかし1919年からビエール・モントゥーが就任して1924年まで5年間にわたって指揮しつづけたので、その間にも組合騒動などもあって、多くの苦難の道をふまねばならなかったが、モントゥーの人格の力で最後に実力を高めて、強固な管弦楽団となった。

そしてその後をついだセルゲイ・クーセヴィツキーが近代から現代にかけての数多くのレパートリーをこなし、ボストン交響楽団を世界屈指のオーケストラに高めたのである。25年間も指揮しつづけたクーセヴィツキーの後任者はシャルル・ミュンシュで、1949年から1962年まで13年間にわたって指揮し、1960年の5月に来日して、活力ある音色のゆたかな演奏を聞かせてくれた。そのミュンシュの後には、エーリヒ・ラインスドルフが指揮者と

なり、現在ではウィリアム・スタインバークが常任指揮者となっている。

またボストン交響楽団の楽員によって、1885年に創立されたボストン・ポップス管弦楽団は、アーサー・フィドラーの献身的な指揮活動によって、誰にも愛される通俗名曲の演奏において独自の輝きを示してきた。

ラファエル・クーベリックはかれの経験からヨーロッパとアメリカの大管弦楽団を熟知しているので、ヨーロッパとアメリカには本質的に相違がないといっているし、アメリカのすべての管弦楽団にはヨーロッパ人が多く、すくなくともヨーロッパの移民の子孫かまたはヨーロッパ人から音楽を学んだ者がすくなくない。その弦楽器奏者にはユダヤ系ヨーロッパ人が多く、管楽器奏者にはイタリア人とフランス人が多い。したがってボストン交響楽団はヨーロッパ音楽のあらゆるスタイルに通じているし、また現代のアメリカ音楽にも経験が深いと語っている。

クーベリックはすでに2度スメタナの《わが祖国》を録音した。しかし今度のボストン交響楽団との録音はそのいずれよりも前進した

解釈をもって行った。スメタナはクーベリックにとって、チェコの国民音楽の創設者であるから、たとえドイツのロマン主義の新しい傾向を示している、たぶんにリストの影響を受けてはいるが、クーベリックはこの曲を詩的情操よりは交響曲に重点をおいて指揮した。かれは形式と構成に音楽のポイントを求めて、とくに音の性質に注意をはらっている。クーベリックは各曲の間の関係に重点をおいて、《ヴィシェフラード》のはじめに出る低音の4音からなる主題が、つづく各曲にさまざまな形で出て来るところを、最後の《プラニク》まで、交響的な構成の結び目として取り扱っている。また第5曲の《ターボル》で重要な役割をしている「フス教の讃美歌」が最後の曲の非常に大きなコーダで、4音の主題と結合されるところにも強く注意をはらって演奏している。実にこうした単一の主題の相互の関係を明らかにするのは、スメタナの古典的な作風を示すことになるので、この《わが祖国》を全曲演奏するときには最も注意しなければならない点なのである。クーベリックの指揮を聴いていると、あらゆる点で古典的な

ことがわかる。かれはけっして感情に走るロマンティストではなくて、あくまでも作品の構成に主眼を置いて、音楽的に純粋に表現しようとする意図が強くくみとれる。模倣の部分やカノン風のパッセイジもまたフガートのところにも、クーベリックは物語からもまた自然や歴史からも離れて、交響的な組織のなかでいかに詩的な絵画をつくるかに苦心している。またボストン交響楽団は、スメタナとクーベリックのその秘密を確実に認識して、その音をつかみまた物語の精神を表現している。スメタナの《わが祖国》の全曲演奏はめったに行われないうし、そのかわり第2曲の《モルダウ》は常時とりあげられているが、このクーベリックの演奏によって、スメタナの《わが祖国》が、真にチェコの音楽の宝のひとつであり、それが古典のすぐれた作品であることが示された。

## 作品について

チェコの作品のなかで、真に交響的といえるものはこの《わが祖国》をおいてきわめて少ない。第2曲《モルダウ》は世界の愛好曲となつて、それを通じてすべての人々がチェコを知り、チェコの愛国精神の発現を認めているが、それでは他の5曲はどうかといえ、実はどの曲も相互的に関連して《わが祖国》を形成しているのであつて、そのひとつでも欠かしては彫刻のすべてがくずれるのであるが、それがうとんじられているのが現状である。

全曲をひとつのサークルとして鑑賞することによって、作曲家スメタナの意図もまた才能も伝わるので、クーベリックの演奏はその全体の統一に立って行われている。リヒャルト・シュトラウスが、スメタナの《わが祖国》は常に全曲が演奏されなくてはならぬと言つたのはあくまでも正しい。昔の神話を気高く伝えた《ヴィシェフラード》、悲劇的な出来事を悲しむ《シャルカ》、祖国の自然の美の《モルダウ》と《ボヘミアの森と草原から》、英雄的ほこりの《ターボル》、未来の幸福な想像を付加し

た《ブラニーク》といずれも祖国の土から出て、愛国精神をもって変化され、そして人々の心に創造の力をもたらす楽曲である。

《わが祖国》はスメタナが完全に聴覚を失つたときに作曲された。1874年10月20日の悲劇的朝はスメタナの人生の転換の瞬間であつた。朝起きてみたら何も聞こえない。ベートーヴェンのようにしだいに耳が聞こえなくなったのではなくて、突然に聞こえなくなつてしまつたのがスメタナである。しかしスメタナは精力的でありかつ積極的な考えをもつてそれを実行に移した行動家でもあつたから、その急激な変化にもめげずに再び作曲の筆をとつた。しかも自己の悲劇的人生を悲しむ作品ではなくて、かれがいかに肉体的にまた精神的に苦しんでいても、それに動かされずに、祖国を思いまた賛美する作曲家であることを示した。その最も純粋なあらわれが、この交響詩《わが祖国》である。スメタナが完全に聴覚を失つて1ヵ月もたたぬうちに作曲しはじめた。1874年11月18日に《ヴィシェフラード》を、12月8日《モルダウ》、1875年1月に《シャルカ》と作曲が進められ、最後の第6曲が出

来上がったのは、1879年であつた。6曲の初演が行われたのは、1882年11月5日にブラハにおいてであつたが、それ以後毎年5月12日のスメタナの命日にはかならずこの曲が演奏され、「ブラハの春の祭」はこの曲で開始されている。

1879年から1882年の間に、スメタナはピアノや合唱曲や歌曲を作曲し、歌劇もまた弦楽四重奏曲第2番を書いたし、交響詩《ブラハ謝肉祭》も計画したが、〈序奏とポロネーズ〉を完成しただけに終わった。また歌劇も作曲しようとしたが、ついに健康状態が悪化して、それも果たせず、1884年5月12日にブラハの精神病院で、60年の生涯を閉じた。

この6曲は連関した交響詩で、純然としたロマン的形式をとっている。スメタナはかれがスウェーデンで活動していたときに、交響詩《リチャード3世》(1857)と《ウォーレンシュタインの陣営》(1860)と《ハーコン・ヤル》(1861)との3曲を作曲したが、耳が不自由になつてからは交響詩ではリストの手法によつてのこの《わが祖国》を作曲しただけである。スメタナはこの交響詩が、聞く人々の自由な

解釈にしたがってうけとられることを望んでいる。

楽器編成は、6曲それぞれによって異なるので各曲別に付記する。

### 第1曲《ヴィシェフラード(高い城)》

スメタナ曰く、「吟遊詩人のハーブがはじめに奏される。つぎに高い城の物語を歌う吟遊詩人の歌が聞こえる。そのすばらしさと名声と、また馬上試合と戦闘と、そしてほこりある城塞の陥落と滅亡とを。そして悲歌的に終わる」。

演奏のハーブの音型は、神秘的なスラヴの歌(ルミール)を連想させる。それはこの連作交響詩の中心主題であり、《ヴィシェフラード》の動機でもまた国民の自由と未来の発展の象徴でもある。したがってこの音型は《モルダウ》の終わりともまた最後の《ブラニーク》の終わりにもあらわれる。そしてこの中心動機から、他の曲の動機の多くが出ているのである。《ヴィシェフラード》では、それが発展し、またさまざまに変化され、なかにフーガの形でも用いられる。

終わりにもう一度「ルミールのハーブ」の音聞かれる。それは《ヴィシェフラード》の最初の音(変ロと変ホ)がベドルジーハ・スメタナの名のイニシャルに関係があるので、シューマンの場合と同じ符號として用いたのである。

### 第2曲《モルダウ》

スメタナ曰く、「この曲は、モルダウ川の沿岸を描いている。ひとつは冷たくひとつは温かなふたつの源からはじまって、やがてふたつがひとつになってより幅広い流れとなる。それがモルダウ川の主題である。森や牧場を通り、田舎の人々が祝い合う村を流れる。月光に照らされた水は、その底に妖精の踊るのを写し出す。その背景に城や邸宅や荒れはてたれんがの建築が空にそびえている。モルダウ川は聖ヨハネの急流を通して流れが早くなるが、やがて幅広くゆるやかにブラハに近づく。モルダウは霧のなかからぼんやりと現れ、堂々と流れてゆく。やがて視界から消えて、エルベ川に流れ込む」。

典型的なチェコの川の音画である。「モルダ

ウの主旋律はチェコの民謡と似ている。しかし同じ旋律が他の国々、たとえばスウェーデンでも用いられているので、スメタナはどこかで聞いたので使用したのであろう。スメタナ自身が、わたしがこの旋律を選んだのは、他の国民も知っており、すべての人々に親しまれているからだと言っている。さまざまのエピソードが、描写的に示されて、急速に変わり、モルダウの動機が再び堂々と響きわたるのが聞かれる。モルダウの流れはあたかも人生の如くに、さまざまな情景をうつし出しながらゴールに向かって進んでゆく。たしかにスメタナはこの《モルダウ》で、ベートーヴェンが《田園交響曲》で行ったように、描写よりは気分の表現を重んじたのである。

### 第3曲《シャルカ》

スメタナ曰く、「この曲は、場所ではなくて事件に関係をもっている。即ち女戦士シャルカの物語である。はじめに、シャルカがいかにも恋人に裏切られて、男性すべてに復讐を誓うかを告げ、かの女のアマゾンの仲間がかの女を援助するのに同意することを示す。遠く

からチラードとかれの友だちの近づくのを聞く。それはかれが尚武の娘たちを征服し、懲罰するべく馬に乗って来るところである。チラードは木にからだをしばりつけさせたシャルカの叫び声や救いを聞く。美しい、救い手のない女を見て、チラードは直ぐ恋におちる。そしてかの女を自由にしてやる。チラードと武装したかれの仲間たちは酒を飲んで、気晴しをするがやがて酔いつぶれて眠る。狩の角笛によって合図が与えられ、森のかこみのなかで娘たちがそれに答える。かれらはそのかくれがから出て来る。つづいて起る無慈悲な殺人とシャルカの狂暴な怒り、かくしてかの女の復讐への切なる思いがとげられる。それが終曲の内容である」。

ここでは、チェコ・アマゾンの争闘の物語のさまざまな面をあらわしている。非常にいきいきとした描写で、とくに愛の場面の音楽はリヒャルト・シュトラウスの音楽のように官能的でありまた激情的でもある。チラードとその仲間とが泥酔して眠るところは、非常に写実的で、コントラファゴットがそのいびきをあらわしている。スメタナは、それが喜劇的

ではなく、激烈なものとしてとられることを望んでいると警告している。この作品は《わが祖国》の前後の関係からして、象徴的に解釈されうるが、それは用心しなければならない。争闘からひきおこされる恐怖の思い出は男と妻のものではなくて、国民の間のものである。というのはスメタナ自身が、政治的闘争の犠牲者であったからである。

#### 第4曲《ボヘミアの森と草原から》

スメタナ曰く、「この音楽は、ボヘミアの田園を見て感じたすべての感動をあらわしている。森から草原から、心をうつ歌が聞こえる。あるときは陽気な、またあるときには深い憂鬱な感じの歌が……。森の中での平和な場所（ホルンの独奏）、エルベ渓谷その他のほほえましい牧場が描かれる。誰もこの曲で、かれが好むところのものを読みとることができる。詩人は完全な自由をもっているが、かれは作品の細部に正確にしたがって進まねばならない」。

この音の詩人は山の頂上から田園的な情景を眺めている。四部のフーガのなかにわれわ

れは木の葉のさらさらいう音や鳥のなき声を聞く。風の客人が村のどこかで演奏しているボルカの断片をもって来る。しかしやがてその旋律の全貌を聞く。曲が進行するにつれて、その動機が、ゆたかな変化を示しながら交互にあらわれる。それは作曲家の感情の変化を巻き込んで、ときに愛らしくまたときには陽気に響く。

#### 第5曲《ターボル》——

#### 第6曲《ブラニーク》

スメタナ曰く、「『汝らは神の戦士たれ』をモットーとしているこのすばらしいフス教徒（注2参照）の讚美歌は、曲のすべてを通じて流れる。ターボル、即ち主要なフス教徒の本拠では、この旋律がしばしば聞かれて、大きな効果を与えている。讚美歌は、目的の確固不動なこと、勝利にみちた闘争、不変、忍耐、不屈に関係をもち、これらの性質はフィナーレで反復される。曲は詳細に分析できない。それは全体でフス教徒の闘争の勇気と不屈の精神とをあらわしているからである」。

「ブラニークはターボルの継続である。フス

教徒の戦士の敗北の後、かれらはブラニーク山に休む。かれらの国がかれらの救いを必要とするときまで深い眠りに入る。ターボル（汝らは神の戦士たれ）における如く、同じ動機があらわれ、そしてそれらによって音楽が構成される。この讚美歌に示されたフス教徒の原理の基礎に立って、チェコ人は幸福と名声を再び覚めさせる。行進曲調で、この勝利の讚美歌で曲は終わり、《わが祖国》の交響詩をすべて閉じる。ブラニークに小さな間奏があらわれる——短い牧歌、ブラニーク山の自然美をあらわしていて、牧童が笛を吹き、こだまがそれにこたえる」

これらふたつの音詩は、いっしょになってひとつの実在を形づくっている。批評家はときに単一主題のターボルを単調だと主張するが、スメタナの言葉によれば、「色彩はどちらかといえば灰色だが、わたしはそれを望んだのだ。その理由から、ターボルとブラニークとはいっしょに演奏されることが必要だ」といっている。ドイツの神話に、フレデリック・バルパロッサがハルツ山のキフホイザーの丘でかれの騎士とともに眠っているとあるが、

南ボヘミアのブラニークの山には、チェコ人の最悪のときに救いに来る戦士がかくされているといわれている。しかしスメタナがいかにロマンティックな物語を変えたか、伝説にしたがって、チェコの守護神のウェンチェスラスが、かれの騎士たちとともに、ブラニークでかれのときを待っていると変えたのは注意すべきである。事実、「よい王のウェンチェスラス」は戦いを好む王ではなくて、平和を愛する君主であったから、スメタナはかれらの祖国を救うべきときが来るまでそこを守っているフスの戦士にそれをあてたのである。この作品の神格化のために、スメタナはフス教徒の讚美歌と勝利の形態の《ヴィシェフラード》の動機とを結合して、《わが祖国》を歓喜をもって結んだのである。

#### スメタナの目的

スメタナの《わが祖国》はわれわれにその美的享受以上のものを与える。スメタナはここでわれわれに光明ある積極的な世界観を阻止するような暗黒の力はなにもないことを伝え

ようとした。スメタナはチェコの民俗性を生かしてこの作品をつくりあげたが、この作品の及ぶ世界は、全人類にある。いうなれば《わが祖国》はチェコではなくて、理想の世界である。そこには妬みもまた嫉妬もない人々の平和な幸福が願い求められている。《わが祖国》とはひとつのユートピアだ。クーベリックの演奏は、そのユートピアをリアルな音によって語り出したのである。

**第1曲《ヴィシェフラード》**は、レント、変ホ長調、4分の3拍子の演奏が2台のハーブのカデンツァにはじまって、詩人ミールの堅琴から出る「ヴィシェフラード」の主題に発展する。ラルゴ・マエストロを経て、アレグロ・ヴィーヴォ・マ・ノン・アジタート、変ホ長調、4分の4拍子となり、「ヴィシェフラード」の主題がフガート風に処理される。ピウ・モツ、ハ長調となって戦闘が描かれ、レント・マ・ノン・トロppo、変ホ長調、4分の3拍子で、「ヴィシェフラード」の主題がもどって来る。

編成は、ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、大

太鼓、シンバル、トライアングル、ハーブ、弦5部合奏である。初演は1875年、ブラハにおいて行われた。

**第2曲《モルダウ》**は、アレグロ・コモド・ノン・アジタート、ト長調、8分の6拍子にはじまり、4本のホルンとトランペットにより狩りの情景を経て、リステツ・テンポ・マ・モデラート、4分の2拍子に変わって農民の結婚式の踊りが牧場ではじまる。ついで変イ長調で月光もとの水の精の踊りにはいる。さらにアレグロとなり、8分の6拍子でモルダウ川の主題がもどり、間もなく聖ヨハネの急流となる。しかしやがて明るいホ長調に転じて、モルダウ川はブラハの市を悠然と流れ去る。

編成は、ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、トライアングル、ハーブ、弦5部である。

初演は1875年にブラハで行われた。

**第3曲《シャルカ》**は、アレグロ・コン・フォーコ・マ・ノン・アジタート、ハ長調、2分の2拍子の激しい主題にはじまり、ピウ・モデラー

ト・アッサイ、イ短調、4分の4拍子で騎士の近づくのを描く。モデラート・マ・コン・カローレ、イ長調、4分の3拍子で愛の場面が描かれ、ついでボヘミア舞曲が展開される。モルト・ヴィーヴォ、ハ長調、2分の2拍子で女戦士の群が殺到してクライマックスに達する。

編成は、ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、トライアングル、弦5部である。初演は1877年、ブラハで行われた。

**第4曲《ボヘミアの森と草原から》**は、モルト・モデラート、ト短調、4分の2拍子で、光り輝く夏の牧場を告げる。全休止の後、アレグロ・ボコ・ヴィーヴォ・マ・ノン・トロppo、ハ長調、4分の3拍子で、フーガ主題が示され、小鳥が鳴く。ついでアレグロ、ト短調、4分の2拍子のボルカに入り、ボヘミアの農民たちの踊りの場面となる。

編成は、ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、トライアングル、弦5部

である。初演は1876年にブラハで行われた。

**第5曲《ターボル》**は、レント、ニ短調、2分の3拍子で「汝らは神の戦士たれ」のコラールが出て、しだいに高潮する。ついでモルト・ヴィヴァーチェ、2分の2拍子で戦闘が開始され、最後に、レント・マエストロ、ニ短調、2分の3拍子で再びコラールが高らかにひびきわたる。

編成は、ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、弦5部である。初演は1880年、ブラハで行われた。

**第6曲《ブラニーク》**は、アレグロ・モデラート、ニ短調、2分の3拍子で、《ターボル》の開始動機にはじまり、アンダンテ・ノン・トロppo、4分の4拍子の牧童の歌となる。ピウ・モツで不安な動きになるが、やがて、神の加護による讚美歌が行進曲調となって、ラルガメンテ・マエストロで堂々と「ヴィシェフラード」の主題が奏されて、全体のしめくくりをして、ニ長調が勇壮な終わりをつける。

編成は、ピッコロ、フルート2、オーボエ2、

クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 4、トランペット 2、トロンボーン 3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、トライアングル、弦 5 部である。初演は1880年にブラハで行われた。

村田武雄

(MG-9580/1の解説より転載)

- 注1.解説の一部にハンス・ルッツの「スメタナの音詩『わが祖国』の古典的考察」を参照した。
- 2.フス教徒は、フス(1369?-1415)(チェコの宗教改革者)によって起されたもので、神聖ローマ皇帝護衛兵に長期抗戦をした。フスは教皇アレクサンデル5世により破門となり焚刑に処せられた。

DDD

Recording: Boston, Symphony Hall, 3/1971

Executive Producer: Hans Weber

Recording Producer: Hans Weber

Tonmeister (Balance Engineer): Heinz Wildhagen

©1971 Deutsche Grammophon GmbH, Berlin



DSD Remastered by Emil Berliner Studios, 7/2011

## 抽選で商品券【5千円分】が当たるアンケート実施中!



アンケート・ページにはパソコンもしくは携帯・スマホでアクセス!  
<http://um-enq.jp/>  
【応募ナンバー: pshm1029】

※コンテンツによっては対応しない機種があります。また、傷、汚れ、破損、光の反射などによって読み取れない場合があります。

### ■ユニバーサル ミュージック ニュースレター会員募集中!

ユニバーサル ミュージック ニュースレターに登録(無料)すると最新のアーティスト・ジャンル別インフォメーションやスペシャルオファー等をメールで受け取ることができます。  
\*パソコン・スマートフォン・携帯(一部非対応有)どちらへの配信も対応しています。

詳しくはこちらから! <http://umusic.ly/umnews>



### ■ユニバーサル ミュージックのホーム・ページ

<http://www.universal-music.co.jp/>



※コンテンツによっては対応しない機種があります。また、傷、汚れ、破損、光の反射などによって読み取れない場合があります。

<取り扱い上のご注意> ●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱ってください。 ●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取ってください。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。 ●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。 ●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。

<保管上のご注意> ●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。 ●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。 ●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。